

菊池寛

先生と我等

先生と我等

一昨年の秋自分が遊び^{かたがた}卒業論文の参考書を読む為に上京した頃、久米と芥川は初て漱石先生を訪ねたらしい。何でも、久米の下宿を訪ねた時、久米は其処^{そこ}にあった「社会と自分」の表紙を開けて見せた、すると其処には「久米正雄様 著者」と書いてあった。自分は、先生を訪問して署名した本を貰った久米が一寸^{ちよつと}羨しくなった。

「皆貰って居たから僕も貰ったんだ、直ぐ署名して呉

れたよ。芥川の奴も貰った」と久米は、やや少々得意らしく云った。

僕達の連中は、高等学校時代には、夏目先生の事を、余り話題にはしなかった、夫それよりも、谷崎潤一郎氏とか、木下杢太郎氏とか小山内薫氏などをつい手近の先輩として、その作物さくぶつを貪り読んで居た。

所が自分が、京都から時々上京する毎ごとに、連中が夏目先生に傾倒して行くのが、著しく日に着くようになった。久米や松岡は頻しきりに「道草」を賞め立てて居た。

以前の「新思潮」時代には、夏目先生と同人とは全く

没交渉であったのが、今の「新思潮」になって、夏目先生の作物なり批評なりが同人の創作に強い影響を及すようになつた。

成瀬は創作の方面では余り影響を受けなかつたが、文学者としての先生に深く私淑して居た。成瀬と文学の話をして居ると、よく「文学論」や「文学評論」が引合に出された。先生の著書をことごと悉あつく蒐めて居たのも、成瀬であつた。

然し、自分は戯曲ばかりに興味を集注させて居たので、戯曲に対して少しも興味を持って居られなかつた夏目先

生に対しては、文壇の先輩に対する尊敬以外には、別に特別なものは持って居なかつた。

自分は夏目先生の作物の愛読者ではあつたが、夫は素人が文展の画に感心するような、感心のし方であつた。

所が、去年京都から上京すると、久米や芥川は可なり夏目先生に近づいて居た。ただ、あれほど崇拜して居た成瀬が一度も先生に逢つて居ないのは意外であつた。成瀬は、「洋行する前に、一度逢つて行くんだ」と念願のようになら返して居た。

何でも七月の下旬で、成瀬が愈々洋行する間際になつ

て、同人どうじんが揃そろって先生のお宅へ行く約束が出来た。自分も一度は逢あって見たいものだと思つたので、一緒に行く事になつた。

皆は久米の下宿へ集まる事になつた。所がその日晩の六時が過ぎても松岡丈だけは何どうしても、来なかつた。すると久米は、

「彼奴あいつはきつと行かないのだ、何か用が出来たのだよ、きつと」と独断した。そして四人丈で行く事になつた。松岡は誘よつて呉れるのだと思つて、自分の家で待つて居たそうで、後で可なり腹を立てた。

その晩自分達が先生の書齋に通されると、先客として、小宮氏と野上氏とが居た。誰でも、夏目先生に初て逢うと、あまりに衰弱して居られたのに驚いて居るが、自分も同じであつた。そしてある哀愁をさえ感じた。

野上氏はその時、ゴリラが人間と、夫婦になつて、子供を産んだ話をして居た。先生は時々不審な点を質されて居た。

「ゴリラと云うものは、そんなに強いものかね」と先生が云つた。すると久米が、

「獅子よりも強いそうで、鉄砲を両手で折るそうです」

と云いながら、鉄砲を折る手真似をした。

「ふむ、そうかね」と先生が感心せられると、久米は急に恐縮したように、

「然し僕達のゴリラに関する智識は皆押川春浪しゅんろうから出たものですからね」と頭を掻いた。

すると、芥川が狒々ひひと人間とが夫婦になった話は、支那の何とか云う本にあります。本の名も確たしかに云ったが、自分は忘れてしまった。すると先生が、

「君はあの本を読んだか」と云われた、そしてその本に就て芥川と先生とが、二、三度問答をした。おしまい

に、芥川は平素のように、早口でパラドックスを云った。すると、先生は暫く考えて、

「そんなものかね」と云われた。

小宮氏は頻しきりに、戯曲を書く事を、先生に勧めて居た。然し先生は、色々に芝居の悪口を云って居られた。要するに、先生は劇的幻覚を信ぜられないのであった。自分
は、先生の心持をよく解する事が出来た。そして非常に、
聡明な人間に対しては、劇的幻覚は起らぬものではある
まいかと思つた。何でも、武者小路氏の戯曲が、盛んに
引き合に出された。

先生は自分達に、日本の創作劇では何が一番いいと問われた。自分が「和泉屋染物店」を挙げると、小宮氏ともう一人誰かが反対した。久米が、

「武者小路の「その妹」です」と云った。が、先生は「その妹」を^{ほとんど}読んで居られなかった。

自分は、殆ど^{ほとんど}黙って居たが、然し気づまりや圧迫を少しも感じなかった。

歸りに芥川が、

「夏目さんには温情があると誰かが云ったが本当だね」と云った。外の^{ほか}三人は、夫^{それ}を肯定するような事を云い合

った。世の中で得がたい経験をしたような気がして、二、三日は幸福であった。

（『新思潮』 大正六年三月）

日本文学電子図書館

先生と我等

著 者：菊池 寛

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館